

---

# 原点0と、あなたの位置。

なつき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

原点Oと、あなたの位置。

### 【Nコード】

N8249L

### 【作者名】

なつき

### 【あらすじ】

数学と人間関係の、革命が起きるとき。

「また、別れちゃいました」

学校指定の学生かばんを床に置いて、私は笑う。かばんに沢山つけたキーホルダーが、じゃらじゃらと鳴る。

「なんだ、今度はどうした」

ホワイトボードをクリーナーでこすりながら、先生も笑う。みどりや赤の殴り書きが消えてゆくのを眺めながら、私はパイプ椅子に座る。

「振りました。すごくいい人なんですけど、いい人すぎて窮屈すぎたっていうか、息詰まって。そういうのってないですか？」

「相変わらず、茅場はそういう話ばかりだなあ」

ホワイトボードをすっかりきれいにして、先生もパイプ椅子に腰をおろした。ホワイトボードのそばにあるパイプ椅子。長方形のテーブルを挟み、私から見て右斜め前のところに先生はいる。先生と私の、いつもの位置。

「優しくしてくれたんです、すごく。いつだって私を気づかせてくれて、でも、そういうのが、ほんとう、悪いけど、嫌になってきて彼女になっただっていうのに、腫れものに触るよう」

「茅場はどんな風に接してほしかったの？」

先生は、いつもそう。洪水のように喋る私の、ほんとうに話したいところをうまく選びとって、先まわりしてくれる。そして私が自分の言葉で話し始めるのを待ってくれる。だから先生に話すと、気持ちやすこし落ち着く。

その質問について考えていたので、ほんの一瞬、教室にはエアコンがうる音だけが響いた。つよすぎる冷風を送り出すエアコンは、もはや攻撃的でさえある。

「もつと気軽に、普通に。私はそんな、腫れものじゃないんですよ。あまりにも気をつかわれても、困惑するっていうか。いちいち『今、つまらない?』とか、『大丈夫?』とか心配されたら、さすがに気が滅入る」

「ああ、そういうことか。そりゃ確かに、ちょっとうんざりするな。互いに自然体でいられなかったんじゃないの?」

「そうそう、そんな感じ」

私は大きくうなずく。そうだ、私は多分、そのことが言いたかった。先生は的確に、言葉に変換してくれる。

先生は小刻みにうなずいて、あごを撫でた。

「彼氏のほうが、慣れていなかったのかもなあ。付き合うことに、すこし腰がひけていたのかもね」

「もつと大胆でいいのに。恋は駆け引き、ですよ」

先生は声をたてて笑う。耳につかない、柔らかい笑い方。

「さて、とりあえず授業やるか」

その一言で、先生とのお喋りは終わる。一抹の寂しさと曖昧な興奮ざめの中で、しかし私は、はい、と答えて数学のテキストを準備する。

きゅ、きゅ、と音をたて、先生はマーカーでホワイトボードにグラフをつくっていく。

「ええと、とりあえず前回の復習からやろうか。この点の座標は、いくつ?」

「……2と3」

「そうそう」

原点 を中心としたグラフには、いくつもの点が打たれている。私はそのグラフを見つめながら、考について思いをめぐらした。

喧騒が満ちる、昼休みの教室。私たち五人は教室のまんなかを陣どって、昼食を片手にかしましく盛り上がる。華やかな高校生活に早くも辟易し始めている、私たちの日常。

えーっ、と驚きの喚声をあげた彼女らの声はあまりにも大きくて、私は、しっ、と口に人差し指をあてた。

「それ、ほんとう？」

「嘘ついたって、しょうがないじゃん」

頬づえをついて足を組んで、紙パックのジュースを一口飲む。

窓ぎわには、気力と体力のありあまった男子たちがたむろしている。彼らのほとんどは、髪を茶色か金色に染めている。この学校には校則といった校則がない。我が校は生徒たちを校則で縛りつけずに「自主性」を育む学校です、といったようなことが、学校のパンフレットに誇らしげに書かれていた。でも、窓ぎわに集う彼らが「自主性」の象徴になっているかというところ、そうは思えない。髪を淡い茶色に染めて化粧もしている私にも、同じことが言えるけれど。

私の友人たちは、窓ぎわの彼らを、何回か、ちら、と見た。そして納得したようにうなずきあい、意味ありげに私を見る。

「なるほどね。なんか考え、今日元気ない」

友人のひとりが言うと、他の友人たちは口々に同調する。やっぱり、私もそれ思った、佐保のせいだったんだ、言葉はいくらでも生まれ出る。

ストローを口でもてあそびながら、窓ぎわの集団の端っこにいる考を眺める。彼は机につっぱしているの、ここから確認できるのは、彼のまじりけのない黒髪だけ。赤みがかった髪の友人から食べものを差し出されても、いらぬ、と眠そうな一言を返すだけ。いつもだったら、子犬のように飛びつくのに。もしかして、昨日眠れなかったりもしたのかもしれない。他でもない、私が、あの男の子を傷つけたんだということを出す。罪悪感みたいなものはなくて、その実感の薄さを不思議に思った。仮にも三ヶ月間、付き合った相手なのに。

「で、なんで別れたのよ？」

コンビ二のおにぎりを頬ばりながら、友人が訊いてくる。

「なんか……飽きた」

わずかな嘘を含ませる。うわあ、とまたもや喚声がおこる。

「さすが、モテる人は言うことが違うねー」

「佐保って何気に魔性だよな」

友人が感心したふうに言う。

「自分のことは棚にあげて」

私はその冗談に笑って返し、もう一口ジュースを飲んだ。

どうしたんだよ、と賑やかに考を小突く声が聞こえてくる。私はジュースを飲み進める。

あの子犬のような考が、しかし私はうつつとうしい。魔性、友人の冗談もあながち的外れでもないのかもな、と思う。だって私は特別考のことが好きなわけではなかった。べつに考じゃなくなつてよかった。付き合っている人がいないときにたまたま考が告白してきてだから私は考と付き合つた。誰かと付き合っていないとなんだか屈だし、休日を持って余すことになるから。それだけの理由だ。

紙パツクのジュースは甘つたるい。唇にべとべとまとわりつき、糖分が身体にひたひたと染みていく。一気に飲みほして、逆に喉が渴いた。甘いものを飲むとこうなることはわかつているのに、いざ自動販売機の前に立つと、私はいつも甘い飲みもののボタンを押してしまう。その甘さは最初こそとろんと心地良いけれど、結局は曖昧なむかつきを残していくばかりだ。高校の自動販売機で出会つたこのジュースだって例外ではなかった。爽やかな甘さというものに私は出会つたことがない。甘いものは必ず粘つくくて、気持ちの悪さが後をひく。

「考くんいい子なのにね」

「顔も悪くないし」

「かっこいいっていうか、かわいいって感じではあるけどな」

友人たちは、私の別れた彼氏のことを口々に評価しあう。私たちはいつだって、こうやって大声で男の子の話をしている。品定めし、ランク付けする。それが他人の付き合っていた相手だってお構いなしだ。じつはあの人いいなって思っていたんだよね、なんて言つて、

他人の彼氏をかつさらっていつてしまうことさえある。その無神経な雰囲気はたびたび私を救い、時には不機嫌にもする。

恋愛は、甘いものに似ている。ふと思って、なんて陳腐だろうと自分に呆れた。

「付き合うつてなんだろう」

塾での休み時間、頬杖をついて私はこぼした。水曜日は数学の授業が二コマあるので、途中で十五分の休憩が入る。つまり十五分間、授業から離れて先生と話ができるということだ。週に一度の貴重な時間。

「また難しい質問を」

いつもの位置、テーブルを挟んで斜め前のパイプいすに、先生は座っている。手を伸ばしても触れることのできないところで、私の話を聞いている。

「だって、わかんないんですよ」

「付き合っ、ねえ」

先生は小刻みにうなずきながら、あごを撫でる。考えごとをしているときの、先生の癖だ。

「付き合っ、ねえ……うん、俺もよくわかんない」

意外な返事だった。先生は私の質問に、だいたいは的確な答えをくれるものと思っていたから。数式の答えを導くみたいに。

「先生にもわかんないことってあるんだ」

「それは、そうだろう」

先生の言葉はすこしだけ、硬く響いた。もしかして気分を悪くさせてしまったのかと思うと、感情の温度が一気に下がった。私はいつも、調子に乗りすぎる。

「うん、でも、まず、どうして付き合っかっていうのを考えるのは、大切かもしれない」

「どうして付き合っか」

「そう。何のために付き合っのか。絶対に、その相手と付き合っな

ければいけないのか。べつに付き合わないでも良い関係が保てる、  
つていう場合は結構あるからね。付き合うのがベストの選択とは限  
らない。そういうことを考えてみるのは、必要かもしれない」

「ふうん……」

わかるような、わからないような、私の理解は曖昧で、捉えどこ  
ろがなかった。

「いったん付き合い始めると、そこには責任が生じる。そしてその  
責任をとらなくてはいけないんだ。最初はそれでもいいかもしれない。  
その責任も含めて恋愛だから。でもいつかはさ、終わるじゃん。  
絶対に。それは確かなことなんだよ。関係が冷え始めたときに、そ  
の責任は初めて重く押し掛かってくるんだ。だから、そう、よく考  
えないとだよ」

先生はそこで急に口をつぐんだ。前触れも予感もなく、ぷつぷつ  
と。

先生は珍しく、苦い顔をしていた。口はまっすぐ結ばれ、じつと自  
身の腕を睨んでいる。話しすぎた、と思っっているのかもしれない。  
先生は普段、どちらかというとな口なほうだ。すくなくとも自分の  
ことを、進んで話すようなことはない。そんな先生がこんなに長い  
話をするのも、珍しいことだった。

でも私は先生の話の内容を、聞き終わった時点でほとんど忘れて  
いた。私は先生の声を聞くのに集中していた。流れるように話す先  
生の声は、低めで、柔らかくて、何よりも素晴らしいリズムと音程  
をもっていた。先生が何を話したか、その内容は思い出せなくても、  
この響きなら何回も反芻できる。

それぞれの物思いに耽って、私たちは無言だった。余韻を残した  
沈黙が、じわじわと浮かびあがってくる。

ホワイトボードには、つい十分前まで繰り広げられていた数学の  
世界の痕跡が残っている。今やっているのは、二次関数という分野  
だ。平面があって、その上に点を打ったり、線をひいたり、そうい

うことをする。学校の授業とこの塾の授業とで、今の私はすくなくない時間平面のグラフを相手にしている。原点 から伸びてゆくエックス軸とワイ軸と、あちこちに存在する点と、捻じ曲がった線。ホワイトボードにも、そのようなグラフがいくつか描かれている。つよい筆圧で描かれたから、ところどころインクが滲んでいる。

現実の世界と数学の世界では、常識も概念も言語もすべてが異なっている。現実の世界があくまでも実際ので感情的なのに比べて、数学の世界はとことん観念的で論理的だ。私はだから、このふたつの世界を完全に切り離して考えていた。あまりにも違いすぎていて、まったくべつのものと思えなかったからだ。互いに関連性はなかったし、結び付けて考えようとしたこともなかった。

でも、あちこちに点が打たれたグラフを見ていて、あるとき思った。これは、人間関係の概念に似ているかもしれない、と。

原点Oは、イコール私、茅場佐保だ。

私の知り合いひとりひとりをあらわす点たちは、さまざまな場所にある。右上や左下、場合によっては真下なんか。原点 との距離もまちまちで、近かったり、遠かったりする。でも原点 を中心に半径一センチメートルの円を描いて、その円のなかに入る点は、今のところ存在しない。どんなに時間をかけたって、考という点Aも、友人たちをあらわす点Bも、点Cも、原点 には近づくことがなかった。彼らとはすくなくない時間を共にした。一緒に過ごした休日は数えきれないし、いろんなことをとりとめもなく喋った。それなのに彼らと私は、きつと十五センチメートルくらいは離れている。そう思うと、なんだかやりきれなくなる。

「先生、私」

分厚い沈黙の層を追い払うには、私の声は弱々しかった。でも先生は、なに、ときき返してくれた。

言おうかどうか、迷った。変な子だと思われないうか。曖昧な苦笑いでかわされて、先生のなかでの私の位置が、遠くなっ

まったりはしないだろうか。でもその迷いは一瞬だった。私はずつとこの考えかたを、誰かに話してみたかったのだから。それに、先生ならきつと理解してくれるんじゃないかと思った。

「グラフ、ってあるじゃないですか。エックス軸があつて、ワイ軸があつて、線がひいてあつたり、点があつたりするあれ」

「うん、あるね」

「グラフの真ん中って、原点っていうじゃないですか。原点ってだいたい、って名前がついているじゃないですか、あれに、私を代入するとするんですよ」

「え？」

「原点 が、イコール私なの。それで、友人ひとりひとりが点なんだけれど、その点たちが、すっごく遠いつていうか」

「ちよつと待つて」

先生は青のペンで、ホワイトボードの端に簡単なグラフを書いた。横棒をひいて、そこに垂直になるように縦棒をひく。ふたつの線が交わるところを、小さな丸で塗りつぶす。その点の右下に、原点、と書き込む。普段授業でつかうのと、なんら変わらないグラフだ。

「で、この原点が、茅場だと」

「そうです」

先生は原点 の隣にイコールの記号をつけ足して、そこにカヤバとカタカナで書いた。縦長でちよつと下手な先生の字で、私の名字が書かれている。

「うん。それで？」

「点Aとか、点Bとか、いっぱいあるんですけど、それがそれぞれ、私の友人とか知り合いとか、あらわすんです」

「こうか」

先生は原点 からみて左上に、点Aを打った。

「あ、点Aは、違って、そこじゃなくて、右下のほう」

先生は振り返って、わずかな間私の目を静かに見ていたが、すぐにグラフに向きなおつて、右下に点Aを打ちなおしてくれた。

「じつ?」

「うん。で、点Bは、右上のほうにいて、それが私の友達」

先生は言われるままに、点B、点C、点Dと点を打っていった。点Eまでは友人を意味していて、名前や人柄をその度話していったのだけれど、点Fからはそういうことは説明しなかった。全部、かつて付き合っていた男の子を示すから。先生は何もきかずに私の言う位置に次々点を打っていつてくれた。グラフが出来上がった。点が八つ打たれただけの、小ぢんまりとした青いグラフ。

「完成?」

私はうなずいた。先生はペンを置いて、そのグラフが私によく見えるように移動してくれた。

こうやって見ると、明らかだ。私が彼らをどう思っているか、どの位置に置いているのか。誰が比較的近い位置にいて、誰が遠い位置にいるのか。

先生は教室の隅にもたれかかって腕を組み、そのグラフをじっと見ていた。睨んでいた、というほうが、もしかしたら適切かもしれない。

「よくわからないことがあるんだけど、これって横軸と縦軸は、それぞれ何を指しているの?」

私はすこし考えて、答えた。

「横軸は、多分、考えかたとか、そういうもの。感性とか合わなかったら、どうしようもないし。性格明るくて、うるさすぎたらプラスの、右のほうにいて、暗くて地味だったらマイナスの左のほうにいく」

「そうか。縦軸は?」

「なんていうか、レベル? 頭よかったら上で、頭悪かったら下かな。でも、あんまり良すぎても、私から遠ざかるっていうか」

先生はあごを何回か撫でた。一瞬顔をしかめて、静止して、ペンを手にとった。難しい問題を解くとき、先生は必ずこの順番で動く。「じゃあ、こうしたらどうだ」

そのグラフの上に、もうひとつ妙な図が書き足された。立体的な図だ。立方体のひとつの角だけに焦点をあわせて、そこを拡大して取り出したような。

「普段は、平面のグラフを勉強しているよね。そのグラフが、一枚の紙だと思って。その紙に、上から一本の棒を突き刺すんだ。紙に対して垂直になるように。そうすると、そのグラフの概念は立体的の世界に移動する。点は平面上だけでなく、空間も移動できるようになる。この棒をZ軸といって、まあそれはいいんだけど、とにかく、グラフというのは平面上に限らないんだ」

立体的になったグラフを想像した。立方体の隅っこの拡大図。

「ちよつと難しい話になっちゃうかもしれないけれど、平面っていうのは二次元の世界でさ、二次元っていうのは二つの要素から成り立っているんだ。ここにひとつ要素を加えてやれば、三次元になるんだよ」

「要素」

「例えば今の話だと、茅場のその、今描いたグラフには、考えかたの種類とレベル、だっけ？ それしか要素がない。茅場はそのふたつだけで、人を判断するの？」

先生はいつもと変わらない穏やかさで、言った。そう言われると、詰まった。そんなことを考えたことはなかった。

すこし待って私の返事がないとわかると、先生は話を進めた。

「この新しい軸、みつつめの新しい要素を加えると、またそのグラフも違って見えるんじゃないかな。例えばそうだな、好感度とか」「好感度」

「何でもいいんだ。ただとにかく、人はそのふたつの要素だけでは判断できないと俺は思うよ。もうひとつ何かの判断基準が加わるだけで、評価はぐつと変わる」

私は黙っていた。

「それにさ、原点Oと何かしらの点が近ければ近いほど、信頼できたりうまく付き合えるってわけでも、ないだろう」

先生の言っていることそのものを、きちんとは理解できなかった。けれどまるでとりなすように話す声の調子からして、私のこのグラフをあまり好意的には受け取っていないということがわかった。私が暖めてきて、大切にしてきた考えかた。胸がひんやりとして、風が通り抜けていくようだった。

「俺としては、こういう考えかたは、あんまり好きじゃないかな。人の評価って、数値化できるものでもないと思うし」

私の判断は正しかった。先生は私の考えに、賞賛どころか共感すら示してくれない。

わずかな沈黙があった。雪のように降り積もる沈黙。何かを言っても言わなくても、気まずい思いをするような。

「さて、そろそろ授業やるか」

いつもの台詞でおしゃべりは終わる。先生はホワイトボードに描かれたグラフを、ためらいもなく消してゆく。最後に目にとまったのは、考をあらわす点Aだった。

家族は皆寝てしまい、深夜の家はしんと静まりかえっている。私は自分の部屋の学習机に頬杖をついて、もの思いに耽っていた。

人との位置はきちつとグラフに表せて、人との距離はものさしで測れるものだと、私はそう思っていた。レベルと感性が原点Oと近ければ近いほど、わかりあえて、仲よくなれるものだと思っていた。さつき先生が書いてくれた、人間関係のグラフを思い浮かべる。

あそこに一本、軸を突き刺したら？ 人間関係のグラフは、今とまったく違うものになるのかもしれない。考を振った理由も、私が先生にだけこの考えかたを話した理由も、先生が共感してくれなくてショックを受けた理由も、ぜんぶわかってくるのかもしれない。

ブルブル、と携帯電話が鳴り、沈黙を切り裂いた。こんな時間に誰だろう、と不審に思いながら、ベッドの上に放り投げておいた携帯電話を手にする。

ディスプレイには、考、と表示されていた。とろうかどうか、迷

う。迷っている間にも、携帯電話は震えつつける。

私の手のなかで鳴りつづけた携帯電話は、コールを五回繰り返したあとに、静かになった。私はすこし、微笑んでしまった。考に、電話をしてくる勇気があるとは。そして、どこか懐かしく思っている自分に驚く。

でも今、電話をとるわけにはいかなかった。だってまだ、グラフの整理がついていない。考の位置だって、考との距離だって、今となってはよくわからない。

私は机の引き出しからルーズリーフを取り出し、先生が書いてくれたものとまったく同じ、人間関係のグラフを描く。ルーズリーフいっぱい、大きく。線を引き、点を打ち、原点Oを描く。

先生に電話したいと思った。先生の携帯の番号すら知らないのに、グラフにしたら遠い位置にいるはずの先生と、今、話がしたかった。私は完成した人間関係のグラフを見おろした。私を表す点や、友人を表す点、付き合っていた男の子たちを表す点、そして先生を表す点、そこに描かれていた。

息を小さく吐いて、鉛筆を原点Oに垂直になるように立てる。ことり、と音が鳴り、これでグラフは、立体の世界に移った。

グラフの革命が始まる。この革命が終わったとき、世界はぜんぜん違ったものになるのだろうかと思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8249/>

---

原点Oと、あなたの位置。

2011年3月18日22時25分発行